

「私が目指す酪農経営」

茨城県立水戸農業高校
畜産科 2年 高野 賢一

私の将来の夢は、酪農を経営して誰が飲んでもおいしいと思える牛乳を搾ることです。私の家では経産牛を30頭、育成・未經産牛を20頭ほど飼育しており、祖父を中心に祖母、父の3人で経営しています。経産牛のいる牛舎は、頭合わせのパイプライン方式で毎日搾乳をしています。給与飼料は自給飼料でまかなっており、夏に収穫するデントコーンを8ヘクタール、春と秋に収穫する牧草6ヘクタールと二毛作で栽培しています。

私は幼い頃から牛舎に行っては牛と触れ合ったり、できる範囲の手伝いをしていました。手伝いといっても、当時私が出来ることは限られていたため、逆に邪魔をしていただけかも知れません。今では学校から帰宅するとすぐ、作業着に着替えて牛舎に行き給餌や除糞作業をしています。そして、搾乳などの重要な作業も一人で出来るようになりました。今の私があるのは、邪魔だと思っても手伝いをさせてくれた祖父のお陰だと思い、とても感謝しています。

そんな私が「酪農家になりたい」とはっきりと思い始めたのは、小学校5年生の頃でした。主に酪農経営をしていた祖父が体調を崩したため、牛の頭数を減らして廃業しようと考えていたのです。そのことを聞いて私は、「将来、酪農を継ぎたいから頑張って続けてほしい」と言ったのを覚えています。それからは祖父が一人で行っていた仕事を父と私で助け、現在も廃業することなく酪農を続けています。なぜ私がここまで酪農をやりたいのかというと、幼い頃から牛が一番身近な動物であり、好きになったからです。牛の顔を見れば見るほど1頭1頭違いがあり、個性が見られるのです。人間に良くなつく牛や人間が嫌いな牛など、私は牛の表情を見るととても穏やかな気持ちになり、その牛たちに魅力を感じたのです。また、自分の手で飼料生産をすることで、四季の流れを感じることが出来ます。春はデントコーンの播種、牧草の収穫、夏はデントコーンの収穫、秋には牧草の播種など自然環境に合わせて仕事をするからです。そして収穫したデントコーンはサイレージにして貯蔵しています。その年の牧草収穫量が少なかったり品質が悪くなかった場合は、泌乳量や牛乳の品質が低下する恐れがあるため、飼料生産においても慎重に行う必要があります。365日、朝昼晩休みのない仕事で酪農を経営していくには苦労や困難が多いと思いますが、私にはとてもやりがいがある仕事だと感じたのです。

私は酪農家になる夢を叶えるために、高校から畜産を学ぼうと決め、県内で唯一畜産科がある茨城県立水戸農業高校に入学しました。畜産科では牛・豚・鶏など家畜に関する基礎知識や飼育管理方法を学んでいます。時には牛や豚の出産に立ち会うこともあります。今まで乳牛としか接点がなかった私にとって、乳牛以外の家畜について知ることはとても新鮮で、さらに興味の幅が広がりました。私はもっと酪農について知りたいと思い、今年の夏、

本校で主催している北海道農業実習に参加しました。私は北海道清水町の酪農家に約1週間、お世話になりました。家以外の農家で作業したことはなかったので、異なる地域での酪農体験はとても新鮮で、酪農経営の難しさや楽しさなどを知るよい機会となりました。私を受け入れてくれた農家の乳牛飼育頭数は30頭ほどで、あまり多くはありませんでしたが、その農家では衛生管理が徹底していました。乳牛は牛舎が不衛生であったり、搾乳前の管理を怠ると乳房炎にかかってしまいます。乳房炎の牛から搾った牛乳は出荷できず、経営に大きな影響をもたらします。また乳牛は環境や気候の変化にとっても敏感な動物です。ちょっとしたことでストレスを感じ、乳量の減少につながってしまいます。牛舎が暑くなれば扇風機を回したり、搾乳時に不快な思いをさせないように手際よく作業を行うなど、乳牛が生活しやすい環境作りなども徹底しており、農家の方は細心の注意を払って搾乳を行っていました。これらは酪農家にとって基本的なことなのです。私は何より作業をする皆が牛に愛情を持って接し、育てている現場を目の当たりにして、私もこんな酪農家になりたいと強く思いました。さらに、一面に広がる広大な土地の飼料畑や大きな作業機械による牧草の刈り取りなど、茨城では到底見ることでできない作業をたくさん見ることができました。北海道での実習は酪農に関する視野が広がり、私の中で将来酪農を経営していくための知識となり立派な財産となりました。

我が家の酪農を継ぐために高校卒業後は、酪農の本場である北海道の大学に進学し、酪農についてもっと学びたいと思いました。さらに、乳牛に関するだけでなく、生産効率の良い飼料生産や飼育管理について深く学びたいと考えています。そして北海道で学びたい理由はもう1つあります。多くの酪農家を訪れることで、酪農に対する様々な考え方にふれることが出来ると思ったからです。酪農経営の仕方を知識として身に付け、私が酪農を経営するときに1つの考えにとらわれず、たくさんある考えの中から良い方法を生み出し、経営に結び付けられたらよいと考えています。

私は毎日家の手伝いもしながら学校では放課後、乳牛の飼育管理を行っています。搾乳の方法は家と変わりませんが、実習で学んだことを生かして作業をしています。畜産科では3年生になると牛・豚・家きん類の専攻に分かれて勉強をします。私は牛を専攻し、そこで人工授精について研究したいと考えています。自らの手で乳牛を生産することで、仔牛の育成方法や飼料給与方法について勉強したいからです。

私の夢は、誰が飲んでもおいしいと思える牛乳を搾ることです。将来は我が家でのフリーストール導入を視野に入れ、乳牛を100頭ほどに増やして経営をしていきたいと考えています。誰が飲んでもおいしい牛乳とはどんなものなのか、今は分かりません。しかし品質が良くなければおいしい牛乳とは言えないと思います。味が良い牛乳なのか、機能性が高い牛乳なのか、現在の消費者がどんな牛乳を求めているのかをはっきりと見極めることで、良い牛乳生産に

つながると思います。そして、おいしい牛乳生産をするために私は飼料生産にも力を入れます。海外からの輸入穀物飼料に頼ることなく、自給飼料の生産をしていきます。そして今ある飼料畑をさらに効率良く利用していければと考えています。自分の目で確かめて生産した飼料ならば、安心して乳牛に給与できると思うからです。そこから高品質な飼料生産を目指し、給与プログラムの思考などをしていきたいのです。

私の考える酪農経営は理想が大きく、現実的に考えると大変なことかも知れません。しかし私が乳牛を愛する気持ちやおいしい牛乳を生産したいという気持ちは、これから先も変わりません。今まで以上に乳牛に愛情を持って育てることを忘れず、乳牛育成に関する知識の習得や酪農現場において経験を積み、将来の酪農経営に生かしていきたいと思います。そして飼料生産から乳牛の生産・育成、牛乳の生産まで、すべての管理工程を把握することができ一貫経営をしていきたいのです。酪農を経営する人間と牛乳を生産する乳牛が共に豊かになれる酪農ができれば最高だと私は思います。
